

新学習指導要領に対応した保健の授業の創造

— 養護教諭とつくる「AEDで命を守る」授業 —

藤本 隆弘 柳田 有子 岡本 昌規 合田 大輔
高田 光代 三宅 理子 三宅 幸信 矢部 裕子
小林 真紀 石井 良昌 松岡 重信

1. はじめに

新中学校学習指導要領が2008年3月に告示され、「体験的な学習や基礎的・基本的な知識及び技能を活用した問題解決的な学習を重視」「生徒の自主的、自発的な学習が促されるような工夫」「教師間の協力的な指導など指導方法を工夫改善し、個に応じた指導の充実を図る」「家庭や地域社会との連携を深める」等が、指導計画の作成等に当たって配慮すべき点としてあげられている。保健の授業においてこのような方向性を具体化しようとしたとき、「応急手当には、心肺蘇生等があること」という新たに付け加えられた文言に対応した授業を創造するためには、どのような工夫が可能なのであろうか。

心肺蘇生法の指導が重視されるようになったのは、「救急蘇生法の国際的なガイドライン（G2000, C2005）」に基づき、日本においても「日本版救急蘇生ガイドライン」が発表されたこと、AED（Automated External Defibrillation：自動体外式除細動器）の使用が2004年7月から一般市民にも認められ、それが2006年の「救急蘇生法の指針」の改訂の中で応急手当の手順に加えられたこと、またそのことに連動して心臓マッサージが一層重視されるようになった、という動向を受けたものである。

今回の授業実施後に発表された高等学校指導要領改訂案（保健）においても、「心肺蘇生法等の応急手当は、傷害や疾病によって身体が時間の経過とともに損なわれていく場合があることから、速やかに行う必要があること」の文言が盛り込まれたが、中学校の改訂と同様の背景からである。

特定非営利活動法人大阪ライフサポート協会は、「BLS（Basic Life Support）写真と動画でわかる一次

救命処置」の中で、「救急蘇生の最終目標は、突然緊急事態に際した人の命を救い、健康で後遺症に悩まされることのない幸せな人生を確保することである。そして、救急蘇生の原点は、倒れた人・急変した人に向かって勇気をもって第一歩を踏み出すことである。」と、その本質を喝破し、多くの人々が心肺蘇生法を理解し実施できるようになることの必要性を説いている。

実際の社会生活においても、心停止状態に陥った人が、偶然に居合わせた人の心臓マッサージ・人工呼吸・AEDの使用により、意識を回復し、一命を取り留めたということが新聞等で報道される機会も多くなった。

このような情勢を受け、目の前にいる生徒に対しても、いざという場面に出会ったとき、勇気をもって対処できるような力を育みたいものであると考える。本研究においては、そのための授業のあり方を検証することとした。

2. 研究の方法とねらい

今回は、4時間の保健の授業の中で、心肺蘇生法とAEDの使い方の知識・技能を効率よく習得するために、次の方法とねらいを柱として実施することにした。

①「養護教諭と保健体育科教諭が連携し、チームティーチングによって授業を進める。」

救急処置を職務の一つとする養護教諭とのチームティーチングは、循環・呼吸器系のはたらきといった生理学や心肺蘇生法の実際・AEDの有効性等に対するその専門性を生かすことと、授業をコーディネートする保健体育科教諭の役割とを、効果的に分担・統合できるメリットがある。また、複数の教師が担当することで指導の効率が上がり、生徒たちの理解や技能の

Takahiro Fujimoto, Yuko Yanagida, Masaki Okamoto, Daisuke Gouda, Mitsuyo Takata, Ayako Miyake, Yukinobu Miyake, Yuko Yabe, Maki Kobayashi, Yoshimasa Ishii, Shigenobu Matsuoka: Health and physical education class for new curriculum standards—The collaborative class with a school nurse “life saving with AED”

習得の徹底を図ることができる。

②「実習では『CPR (Cardio-Pulmonary Resuscitation) & AEDパーソナルトレーニングキット (レールダルメディカルジャパン株式会社製：以下トレーニングキットとする)』を生徒一人ひとりが使用できるようにする。」

従来の練習用器具は、高価なために準備台数も限られ、その結果一人ひとりが練習に割ける時間と回数も制限されてしまっていた。しかし、このトレーニングキットは安価で一人に1台ずつ準備できるので、生徒が思うようにトレーニングキットに触れて実習を重ねることができる利点がある。少人数グループでの「教え合い⇔学び合い」学習の形態なども柔軟に取り入れることができるので、積極的・主体的に取り組み、効率的に指導・学習できるようになるとともに、理解や動作を相互に確認し、知識・技能を高めていくことが期待できる。

③「トレーニングキットを学習後家庭に持ち帰り、家庭や社会との連携を図る第一歩として、学習した内容を家族に説明・実施する。」

家庭に持ち帰り家族と共に学習することで、心肺蘇生法やAEDの使い方についての知識・技能をより深化・定着させることが期待できる。また、心肺蘇生法やAEDの使い方を社会に普及させてゆく起点としての役割を、保健の授業が担えると考える。

3. 研究の手続き

- 1) 研究対象 広島大学附属福山高等学校
1年生男子38名
- 2) 期間 2008年11月
- 3) 研究方法

表1に示すように授業を実施し、事後アンケートと指導者の感想から授業分析を行い、より効果的な指導のできる授業のあり方を検証することとした。

表1 学習計画 (4時間)

	内 容	分 担
第1時	○救急の事例から学ぶ ○循環器系・呼吸器のはたらき	保体科教諭 保体科教諭
第2時	○心臓の動くしくみ ○心肺蘇生法の重要性	保体科教諭 養護教諭
第3時	○実習—心肺蘇生法	養護教諭—示範・説明 保体科教諭—巡回指導
第4時	○実習—AEDの使い方 ○まとめ	養護教諭—示範・説明 保体科教諭—巡回指導 保体科教諭

第1時の「救命の事例から学ぶ」では、7つの救命事例についてまず考えた。そこでは、「だれが」「どのように」「何を」行ったことで人命が助かったのか、ということ进行分析し、「一般市民が」「敏速に」「人工呼吸・胸骨圧迫をしたり、AEDを使う」ことで人命が救える可能性が高まるということを理解させた。生徒はこの過程を通じて、「自分にもできそうだ」「やらなければ」という見通しと意識を持つようになり、その後の学習や実習に対しても効果があると期待できる。また、「呼吸器・循環器系のはたらき」では、人工呼吸や胸骨圧迫が救命になぜ必要なのかを理解するために、呼吸のしくみや心臓のはたらきについてより深く学習した。

第2時は、「心臓が血液を送り出すしくみ」と「心停止の状態についてと心肺蘇生法 (人工呼吸や胸骨圧迫)」の機序について詳しく学習し、人工呼吸や胸骨圧迫が何故必要であるか、何故効果があるのかということより深く理解した。

第3時は、生徒全員がトレーニングキットを1台ずつ使用して心肺蘇生法(人工呼吸と胸骨圧迫を中心に)の実習を行った。養護教諭がその専門的な技能と知識を生かしながら示範と説明を行い、保健体育科教諭は全体の流れや生徒の状況を把握・コントロールしながら学習を進めた。

第4時は、心肺蘇生法の復習とAEDトレーニングユニット (日本光電工業株式会社製：以下トレーニングユニットとする) を使用してAEDの使い方の手順を学習した。AEDの使い方はトレーニングユニットの音声にしたがって実施し、トレーニングユニットの機械操作を保健体育科教諭が行いながら、示範と説明を養護教諭が担当し学習した。

授業終了後には生徒にトレーニングキットをそれぞれ自宅に持ち帰らせ、家族の人に説明をして一緒にやってみることを課題にした。学校で学習した心肺蘇生法とAEDの使い方を家族の人に教えることは、知識・技能を高め、定着させるとともに、心肺蘇生法やAEDの使い方を、多くの人に広めてゆく起点になるであろうことを期待した。

4. 結果と考察

(1) 養護教諭と保健体育教諭の連携について

①養護教諭の感想

生徒におこる傷病について、保健室や医療機関でなければ行えない処置もあるが、自分自身あるいは生徒同士で行うことのできる処置もある。生徒たちには自分自身で適切に対処できる能力を、処置することを通じて身につけてもらいたいと考えて、保健室来室者へ

の直接の個別指導や、保健だよりなどで指導を行っている。しかし、保健室での指導は、個人あるいは数人単位の個別指導であり、また、保健だよりは全校生徒に発信できるが、一方的な指導になってしまうことが多く、その反応はわかりにくいという弱点がある。

今回は保健の授業で、クラス単位の生徒に一齐に関わることができ、しかも直接生徒の反応を確認しながら、4時間にわたって教えるため、より効果的に生徒に伝えることができた。

また、従来でも、保健の応急手当・AEDの授業の後で保健室に来た生徒が保健室に設置してあるAEDに気づき、復習をしている生徒がみられていたが、今回の授業に関わってみて、細部にわたって授業内容を把握することができたので、今後はそのような生徒に対して、より効果的な指導がその場でできると思われる。さらに、その反応をつかむことが、次に授業を計画にするときには生かすことができるという手応えも得ることができた。

②保健体育科教諭の感想

保健の授業として、心肺蘇生法をとりあげる場合は、これまでは2時間程度と時間も少なく実習器具も数台のため、一人の生徒が人形などに触れるチャンスは1回かせいぜい2回くらいしかなかった。

今回、トレーニングキットを購入し、生徒に数多く練習させることができたことで、理解を深め、技能を高めることができた。また、養護教諭との連携により、より深く知識・技能を習得させることができ、さらに、授業の進め方、実習の際の役割分担などを考え、工夫できたことで、いつも以上に生徒たちは意欲的・積極的に学習できたと思う。

(2) 授業の展開について

①「救命事例から学ぶ」について

救急蘇生の原点は、「倒れた人・急変した人に向かって勇気をもって第一歩を踏み出すことである」ということに気づかせることが大切であると考えた。そこで、救命事例から、「自分が」「素早く」「何か」を行うことが重要であることを理解させ、生徒にできる「何か」とは119番通報・助けを呼ぶ・AEDの手配や人工呼吸・胸骨圧迫・AEDの使用などであることに気づかせ、理解させ、必要性和見通しをもたせた。

生徒たちは、「近くにいた人が即座に行動を起こし、人命救助を行っていることが、すごいと感じた。また、僕もこういうときに遭遇したら積極的にしたいと思います。」「心肺蘇生法やAEDの使用方法を知っておいたら、いざというときに使用できるので、もっと知っておこうと思った。」「心肺停止の状態であるような傷

病者を発見したら、周りの人が何か行動を起こさないとその人は助からないと感じた。そして、ただ119番通報しただけでそのまま来るのを待つだけではなく、AEDや人工呼吸、心臓マッサージなどをしながら救急車が来るのを待つようにしないといけないと思った。」「蘇生法をするまでの時間が短いほうがいいことも知った。」「普段から練習しておかないといけない。」「など、敏速に実施しなければならないことや、自分がしなければならないこと、練習しておくことが必要であることなど、多くのことを読み取り、「緊急の事態には、一人ひとりの勇気と責任が大きく関わってくると思った。」「心肺蘇生法を習っていると、緊急のときに人の命を救えるので、ぜひとも自分のものにしたいと思った。」「実際に起きたときにはパニックになるかもしれないが、自分が行動することによって助かる人がいることを強く感じた。」と自分がその立場になることをも想定しており、意欲的に知識・技能の習得に向かう効果をもたらし、自分が積極的に処置に関わることの必要性を十分に感じとったといえる。

表2 「救命事例から学ぶ」

「素早い対処」

- ・緊急の事態には、一人ひとりの勇気と責任が大きく関わってくると思った。
- ・早く手当てをすることが重要。
- ・どんな人でも人の命を救うことができるんだと思った。
- ・やはり緊急の時にはすぐに対応しなければならないと思った。
- ・事故が発生したら、その場にいる人たちでできる限りのことを素早く正確にしなければならない。
- ・近くにいた人が即座に行動を起こし、人命救助を行っていることが、すごいと感じた。また、僕もこういうときに遭遇したら積極的にしたいと思う。
- ・心肺蘇生法を習っていると、緊急のときに人の命を救えるので、ぜひとも自分のものにしたいと思った。
- ・心肺停止している人を見つけてからは躊躇せず、すぐ心肺蘇生を開始することが大切だと思った。

「自分もできるようにになりたい」

- ・知っているだけで、救うことができると感じた。
- ・心肺蘇生法を会得しておくといざという時に便利
- ・実際に起きたときにはパニックになるかもしれないが、自分が行動することによって助かる人がいることを強く感じた。
- ・やはり、生命は大事なものだと思う。そういうときに遭遇する可能性は少ないとは思いますが、ないとはいえないので大事なことだと思う。
- ・周りにいた人が助けているので、自分も助けられるようにならないといけないと思った。
- ・心肺蘇生法やAEDの使用方法を知っておいたら、いざというときに使用できるので、もっと知っておこうと思った。
- ・いつ心肺蘇生などの人と遭遇するか分からないので、心肺蘇生法の方法などは知らなければならないと思った。
- ・心肺蘇生法はいつ、どこで突然に必要なかが予測できないから、普段から練習しておかないといけない。
- ・心肺停止の状態であるような傷病者を発見したら、周

りの人が何か行動を起こさないとその人は助からないと感じた。そして、ただ119番通報しただけでそのまま来るのを待つだけではなく、AEDや人工呼吸、心臓マッサージなどをしながら救急車が来るのを待つようにしないといけないと思った。

- ・今回はモデルだったから自分はかなり楽だったけど、本番ではまず落ち着くことが大切。
- ・周りの人が心肺蘇生法を理解していて、助かったケースが身近にあることに驚いた。もう自分も助ける側として資格を得たわけだから、いつでも心肺蘇生法を行えるようになりたい。
- ・実際にけが人と遭遇したときに適切に対処できるかは分からないが、このような経験をつんでおくことが重要だと思った。
- ・一人ひとりが心肺蘇生法の知識を持ち、実践できれば、大体的場合は助かる見込みが出てくることを知り、これから生きていく中で必要性の高いものであると思った。
- ・しないよりしたほうが、絶対よいのだと思った。専門家でなくても助けられるんだなと思った。
- ・僕でも人は救える。
- ・心肺蘇生法を知っていることで、特に専門的な知識がなくても人命救助ができる。命に貢献ができるということ。
- ・いざという時に、自分が人の命を救えるかもしれないという嬉しさと同時に助けられないかもしれないという恐怖。
- ・今まで普通の人が人の命を救うなんて無理だろうと思っていたが、この授業で蘇生法を正しく理解していれば助けることもできると分かった。その上で蘇生法をするまでの時間が短いほうがいいことも知った。
- ・心肺蘇生法を正しく行うことで人の命は助かることがあるので大切である。
- ・実際に対応できなければならない。

「難しさ」

- ・大変だと思った。
- ・いつ自分にも危険が及ぶか分からない。
- ・心臓マッサージはよくテレビで見かけていたけれど、実際に練習していないとできるものではないことが分かった。
- ・混乱せずにまずは落ち着くことが大切だと思った。
- ・心肺蘇生法は正しくするのは意外と難しいと思った。AEDは優秀だと思った。

「その他」

- ・少し時間がたっても心臓マッサージと人工呼吸をすれば助かるかもしれないことが分かった。
- ・心肺停止に至るまでの要因がたくさんあって驚いた。

表3 「心臓の動くしくみ」「酸素の運ばれるしくみ」について理解できましたか？

	心臓の動くしくみ	酸素の運ばれるしくみ
はい	34	35
いいえ	2	1

表4 人工呼吸、胸骨圧迫、AEDの使い方が理解できましたか？できるようになりましたか？

	人工呼吸		胸骨圧迫		AED	
	理解	できる	理解	できる	理解	できる
はい	35	30	36	28	36	36
いいえ	1	6	0	8	0	0

②呼吸器・循環器系のはたらきについて

人工呼吸・胸骨圧迫・AEDの使用についての技能を習得をする実習の前に、人工呼吸・胸骨圧迫のしくみと有効性について理解させたいと考えた。

そのために、呼吸器・循環器系のはたらきについては、「呼吸器のしくみとガス交換」「心臓と血液の流れ」などの資料を準備して、時間を割いて丁寧に学習した。そのことで、心臓の動くしくみ、酸素の運ばれるしくみについて、生徒たちは十分に理解できたと考えている（表3参照）。さらに、こうした学習は、人工呼吸・胸骨圧迫の方法やAEDの使用についての理解を深めることにつながった。意味もわからず動作の習得のみに終始するのではなく、その動作の意味（有効性と限界）をよく理解したから、自信をもって人工呼吸・胸骨圧迫・AEDの使用ができると、多くの生徒が答える結果につながったと考える（表4参照）。

確かな知識に裏づけされた技能を高めるねらいを十分に達成するためには有効な内容であったと言える。

③トレーニングキットを生徒一人に一つずつ使用したことについて

従来の授業では、高価な実習器具のために準備する数にも限りがあり、一人の生徒が人形などに触れるチャンスは1回かせいぜい2回くらいしかなかったが、安価なトレーニングキットを購入できたことで、トレーニングキットを生徒一人に1つずつ使用することが可能になった。それにより生徒がトレーニングキットを自分の思うように使用でき、触れる回数が増え、生徒は積極的・主体的に取り組むことができるようになった。このように一人ひとりが集中して実習に取り組むことができたばかりでなく、台数が多いために少人数グループを多くつくり、グループ内で『教え合い⇔学び合い』という活動を活発に行ない効果的に学習することができた。

表4にあるように人工呼吸は36人中30人、胸骨圧迫は28人、AEDの使い方は36人全員ができるようになったと答えたのは、トレーニングキットが一人に1つあり、生徒それぞれが思うように使えたことで、他の人の注目を浴びることもなく失敗をしても、何度もくり返しやってみることができ、やがて成功するようになり、できると実感できたためであると考えられる。

『人工呼吸』についてできなかったと答えた6人は、「口で口をふさいだつもりでも、どこからか空気が抜けているのだと思う」「時々空気が漏れてしまう」「鼻をつまむのを忘れる」「上手くいくときと失敗するときがある」「気道確保が難しい」、『胸骨圧迫』についてできなかったと答えた8人は、「上手く押すところを見つけれない」「押しが足りず、10回くらいで疲

れてしまう」「時々圧迫が不十分だったり、力を抜くことができている」「力加減」「力を一点に集中させるところ」「強すぎる気がする」と言っている。これらは、技能的には多少、不正確であるにしても、その内容を完全にできないのではなく、失敗をしたり、技能の達成の不十分さを答えているのであり、基本的なことは身につけており、何度も繰り返して試したからこそ現れてきた感想であり、触れる回数の少ない従来の実習では気づきにくかった感想である。トレーニングキットに数多く触れることによって多くの生徒は、「できる」という自信を身につけ、「この授業で蘇生法を正しく理解していれば助けることもできる。」と見通しをもち、『第一歩を踏み出す』決意が見られる。基本的な技能はほぼ身につけており、心肺蘇生法やAEDの使い方の技能の習得についても、十分にねらいを達成できたと考える。

(3) 家庭との連携について

「家族で誰か講習を受けたことがありますか」という質問に対しては、「ある」が17人、「ない」が19人で、「ある」の内訳は母12人、父6人であった。「ある」が半数近くに上っていることは、社会が普及に努めてきた成果であると思う。その中で、『以前にやったことがある』と答えた保護者の中には、「AEDの使い方等、以前に講習を受けましたが、身につけていなかったようで、今回改めて学びました。毎年1回は、こうして家族で学び直し、いざという時に自信を持って実施(救命)できればいいと思います。」と繰り返すことの必要性を語っている。また、『初めて』と答えた保護者の中には、「心肺蘇生の講習を受けたことがなく、初めて家族全員でやった。その場面に出くわしたときにできるかは不安だが、とてもいい経験になった。」などという感想があり、生徒が学校で学習したことが家族の人たちの再学習や初めての学習の機会となっており、社会への普及の起点としての役割を果たすことができた。

生徒の家庭での説明・実施の様子については、「手際よく説明してくれた。」「的確な指示だった。」「学校で真剣に学んだことをレクチャーしてくれた。」「難しかったが、使い方を教えてくれてよく分かった。」とある。授業終了後に、家にトレーニングキットを持ち帰り家族と実施することは事前に予告していたが、学習したことを、家族に真剣に伝えようとした様子が伺える。生徒が心肺蘇生法やAEDの使い方についての知識・技能の整理ができて、それらが高まった、と同時に「息子とちゃんとコミュニケーションが取れてよかった。」という言葉に代表されるように家庭内の

人間関係の深まりに役立ち、とても好意的に受け取って頂いたように思う。

「昨今の信じ難い事件の起こる世の中で生きていかなければならない我が子の時代に自分と身近な誰かの命を守る必要性を感じてくれたのならうれしく思う。」「今後も、このような活動をよろしく願います。」とあるように、家庭との連携したことで、たくさんの意見をいただき、その大切さをあらためて認識した。

学校の教育への期待にこれからも答えていかなければならないと考える。

表5 家族の感想

<p>「子どもたちは」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・手際よく説明してくれた。このような学習を高校生からすることは大変よいことだと思う。使わずにすむに越したことはないが、何かあったとき積極的にこれを生かしてくれればと思う。 ・学校で真剣に学んだことをレクチャーしてくれた。息子とちゃんとコミュニケーションが取れてよかった。 ・人形を使って行うのは初めてで、なかなか上手にはいかなかった。しかし、息子の説明でできるようになった。知識だけを身につけるのではなく、実践することは大切だと思った。 ・正しく理解して、的確な指示を出していた。 ・難しそうだったが、使い方を教えてくれよく分かった。 <p>「以前やったことがあるが」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・夏休みのプールの監視のためにPTAで毎年講習を受けていた。人工呼吸はなかなか難しい。いざというときに役立つ。 ・心肺蘇生法は小学校のPTA行事で参加したことがあるが、実際に自分ひとりで行わないといけない場合は確実にできるか不安。しかし、子どもから聞いて少し思い出した。 ・以前、学んだときを思い出して実践することができてよかった。 ・6年前に地域のプール監視のため人工呼吸の講習会を受けた。6年前はAEDの講習がなかった。テレビでAEDの使い方をしていたので、講習を受けてみたいと思った。 ・AEDの使い方等、以前講習を受けたが、身につけていなかったようで、今回改めて学んだ。毎年1回は、家族で学び直し、いざという時に自信を持って実施(救命)できればいいと思う。 <p>「初めての」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・初めて体験したが、意外と力が必要なことに驚いた。人工呼吸は大変難しく、ちゃんと気道が確保されていないと正確に行えないことを痛感した。よい経験ありがとうございました。 ・心肺蘇生の講習を受けたことがなく、初めて家族全員でやった。その場面に出くわしたときにできるかは不安だが、とてもいい経験になった。ありがとうございました。 ・貴重な体験ができたと思う。今後もこのような活動をよろしく願います。 ・今回はじめて教えてもらったが、とても難しく、勉強になった。 ・心臓マッサージや人工呼吸の仕方について今までに習う機会がなかったので、勉強できるよい機会になった。 ・初めてのことだったが、分かりやすく説明してくれた。 ・一緒に勉強できて参考になった。 <p>「命の大切さ」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・命の大切さについて深く考えさせるものだった。

- ・中高生のときからこのような実技が受けられるのは親としてありがたく思う。昨今の信じ難い事件の起こる世の中で生きていかなければならない我が子の時代に自分と身近な誰かの命を守る必要性を感じてくれたのならうれしく思う。
- ・必要に迫られたとき、心肺蘇生法が正しくできたらしい。
- ・心肺蘇生の大切さがよくわかった。
- ・命の大切さを考える、とてもよい機会だった。
- ・心肺蘇生法を理解し、いざというとき、いつでも対応できるようにしておくことは人の命に関わる大事なことだと思った。

【その他】

- ・町の中の各施設でAEDを見かけるようになった。高校生がこの使い方を学ぶのは大切なことだと思った。
- ・今後、心肺蘇生法について興味をもつようにしたいと思った。
- ・倒れている人に対する対処を知っておくことは大切なことだと思うので、より積極的に取り組んでほしいと思う。
- ・AEDの設置箇所がまだ少ないように思う。数をもっと増やして誰もが正しく使えるようになれば…と思う。
- ・学生のうちから心肺蘇生法・AEDの使い方の勉強をすることは大変よいことだと思う。AEDが置いてある場所などを日ごろから知っておくことも大切だと思う。

5. まとめと今後の課題

確かな技能を習得するためには、まだまだ時間をかける必要があったかもしれないが、「倒れた人・急変した人に向かって勇気をもって第一歩を踏み出すこと」という点においては、今回の学習を通して、自分がしなければならないという責任感や意欲を喚起することができ、そのための知識を深めることや基本的な技能を身につけ、行動をおこす勇気をもつことは学習できたと思う。

養護教諭と保健体育科教諭とのチームティーチングは、救急処置という形で生徒と関っている養護教諭と普段授業という形で生徒と関っている保健体育科教諭がそれぞれの専門性を生かした授業展開ができたという点で効果的であったと思う。今回の成果は、救命処置の単元以外でもいかされると考えられるため、今後さらにチームティーチングのあり方については研究を続けていきたい。

家庭との連携については、初めてこのように授業内容を持ち帰り、家族で実施してみたことである。予想以上に大きな反響と成果を得た。これは今後も研究する価値があるものと考ええる。また、保護者からの感想にもあるが、「忘れても」「次の機会に」継続して学んでいくことが必要であり、今回でこの学習が終わりというわけではなく、機会を捉えて、繰り返したり、再度学習することが、いざという時に行動をおこすために、重要であると考ええる。

今回の限られた学習時間の中で、伝え切れなかったことや生徒に疑問を残したことについて(表6)は、

予定していた時間以外の授業を利用して補足説明をした。これらのことも、今後は学習計画の中に入れて、計画したい。

表6 もっと知りたかったこと

【人工呼吸・胸骨圧迫】

- ・事故やけがに種類によっては人工呼吸・胸骨圧迫をしないほうが良いこともあるのか。
- ・心臓は体の中でやや左よりのところにあるのに、なぜ心臓マッサージは真ん中を圧迫するのが知りたい。

【AED】

- ・電気ショックの電圧。
- ・なぜパッド貼る位置があそこなのか。
- ・年齢によって効果が変わるのかどうか。

【救命率】

- ・緊急処置を行った場合の命が助かる確率。
- ・年間、心肺蘇生法で助かった人はどれくらいいるんだろう。

【回復したときに】

- ・倒れた人が心臓マッサージにより息を吹き返したとき、なにを根拠に息を吹き返したと判断すればいいのだろうか。
- ・蘇生中に心臓が弱く動き始めた場合、強くなるまで蘇生を続けるべきか、途中でやめるべきかよくわからなかった。

【その他】

- ・人体のほかの部位の働きと、それに関する応急処置の方法。
- ・他にも助ける方法があるのか。
- ・救命時にやってはいけないこと
- ・心肺以外でも脳などの停止などによる緊急時のときにすべき応急手当など、様々な状況に応じた手当て。
- ・消防署の職場体験で習っていたので、思い出すいい経験になった。

参考文献

- 1) 日本版救急蘇生ガイドライン策定小委員会：【改訂3版】救急蘇生法の指針《2005》市民用、へるす出版、2007
- 2) 日本版救急蘇生ガイドライン策定小委員会：【改訂3版】救急蘇生法の指針《2005》市民用・解説編、へるす出版、2007
- 3) 特定非営利活動法人大阪ライフサポート協会：BLS写真と動画でわかる一次救命処置、学習研究社、2007
- 4) 田中秀治他：教師のための2時間でできる心肺蘇生法トレーニング、大修館書店、2008
- 5) 田沼久美子他：しくみと病気がわかるからだの事典、成美堂出版、2007
- 6) 森亨：からだのしくみ・はたらきがわかる事典、西東社、2006
- 7) 河野寛幸：心肺停止と不整脈 AHAガイドライン2005に基づくBLSとACLSの要点、日経BP社、2008